

台灣仏教交流の旅

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職 佐藤俊明

台北まで

空港が成田に移つてからは、羽田から海外に出ることは絶えてなかつた。それが今回羽田発となつたため、十何年かぶりで羽田空港の国際線出発ロビーに足を入れた。途端に「おやつ、間違えたかな」と思った。十時半を過ぎているのに、ロビーには誰もいない。店のシャッターは閉じたままである。

「いや、間違いぢやない」そう思い返した。

私の脳裡にあつたのはかつての羽田国際線出発ロビーの雑踏だつた。それは昔のこと、今はくらべものにはならない。国際線とはいものの、日本アジア航空と中華航空の数便が飛んでるに過ぎないので。いわばローカル空港のようなもので、出発間際になれば人はやつてくる。そう思つて腰を据えて本を読んでいると、案の定ぽつぽつ人が入つて來た。

十一時二十分に待ち合わせることになつていい。途中の交通渋滞を顧慮して私は八時四十分

に寺を出たが割に順調で二時間後には着いた。

一方、十時に出たという黒田理事長、阿部・駒澤の両参与は交通渋滞に巻き込まれ、ようやく到着したのが十二時、距離は半分でも私と同じく二時間を要している。

「はて、スムーズな旅ができるかな」とちょっぴり不安になる。

黒田理事長は「昨日の『中外』見ましたか」という。「いや、見てません。昨日はとても忙しかったんだ」というと、『中外日報』の切り抜きを出して見せてくれた。それは次のような記事である。

一行は十二日に清水岩寺で彼我の殉難物故者追悼法要を厳修し、台湾の仏教者と交流。十三日には台湾大学で講演が予定されており、佐藤常務理事が曹洞宗の宗典である「修証義」の公布百周年に当たって、日本仏教が近代化の過程で生んだ新しい経典編纂のグローバルな意義を論じ、黒田理事長が善光寺の育英事業について紹介、阿部参与は原始仏教について講演する。

台湾仏教交流の旅へ

善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理事長、事務局＝横浜市港南区日野一六〇四）の黒田理事長、佐藤俊明常務理事、阿部慈園参与（東方学院講師）、駒澤晃参与（写真家）の四人は今

月十一日から十四日まで台湾訪問の旅に出発し、善光寺の姉妹寺である清水岩寺を訪問して彼我の物故者追悼法要を厳修、また十三日には台湾大学で講演するなど仏教交流を深める。

同育英会は、海外に留学僧を派遣する育英事業を継続しているほか、仏教文化圏に属するアジアや欧米の仏教流伝の地など、事業を通じて交流のある国々への視察旅行を実施し、友好を深めている。昨年はタイ、今春には韓国訪問を果たした。

一行は十二日に清水岩寺で彼我の殉難物故者追悼法要を厳修し、台湾の仏教者と交流。十三日には台湾大学で講演が予定されており、佐藤常務理事が曹洞宗の宗典である「修証義」の公布百周年に当たって、日本仏教が近代化の過程で生んだ新しい経典編纂のグローバルな意義を論じ、黒田理事長が善光寺の育英事業について紹介、阿部参与は原始仏教について講演する。

葉阿月氏を顧問に

なお、善光寺育英会は、日本の駒沢大学、東京大学大学院に留学し、中村元博士の指導を受けて博士号を取得した台湾大学教授の葉阿月氏を中村博士の推薦により同育英会顧問に推戴することを決め、今回、正式にその辞令を伝達することにしている。

一読して「こりあー、頑張らなくてはいかんなあ」と心に誓い、出国審査の第一関門に足を向けた。

中華航空のジャンボ機に乗るのはこれが二回目。十年前、アメリカから帰る時乗ったのが最初だった。

「こんなおんぼろで大丈夫かしらん」と不安になつたものだつた。それにくらべると今回のジャンボ機はだいぶ垢抜けしている感じだ。そ

ういえば十日ほど前のNHKテレビで「ミニ・ドラゴン」と題して台湾の急速な繁栄ぶりを報じていたが、その繁栄の一端がこの飛行機にもあらわれていたというわけか。

定刻より少々遅れて二時に離陸、三時間少々のフライトだが、台湾は時差一時間遅れなので四時間二十分、中正国際空港に着陸した。「中正」は蔣介石の号にちなんでつけられた名前である。

空港からホテルまで一時間かかるということだったが、ちょうどラッシュ時なので一時間半はかかった。途中洪水のようなバイクの列を幾度か見た。一人乗りが随分多い。退社時刻で走路をいそぐバイクなのである。日本の会社では退社時刻になつてもすぐには仲々帰れないといふのに、台湾では会社は会社、家庭は家庭とはつきり割り切つて家庭サービスは決して犠牲にしないという。買物などには必ずパパが同行す

るということで、デパートは午后十時まで開かれている。それにしても短い年月の間にこれだけの繁栄を招来しているのだから、日本人のあまりにも仕事本位の生活態度は改めなくてはならんよう思う。女婿佐高信の『逆命利君』にこんな話が載っている。

逆命利君の主人公鈴木朗夫が日頃親しくしていた歐州共同体の役員に招かれて夕食を共にした。午后十時半をまわっていた頃だというのに、レストランの真向いにある日本の某大手企業のオフィスだけが、あたりのオフィスはみな退社して真っ暗なのに、煌々と明かりをつけ、かなりの数の日本人社員が忙しそうに働いているのが見えた。

それを指差しながら、その役員は言つた。
「われわれヨーロッパ人は一定の生活パターンを持つてゐる。それは”市民”として果たすべ

き義務に従つて構成されている。すなわち”市民”たるものは三つの義務を應分に果たさねばならない。一つは職業人として、二つは家庭人として、そして三つは地域社会と国家に、それぞれ奉仕する義務である。この三つの義務をバランスよく果たさないと、われわれは”市民”としての資格を失う。ところが真向いのオフィスで働いてゐるあの人たちは、どう見ても一つの義務しか果たしていないように見える。あの人たちは妻子、家庭をかえりみず、地域社会に対する義務を放棄し、仕事だけに生活を捧げていのではないか。

ヨーロッパでも、”市民”としての義務の一部を免除されている人たちがいる。軍人と警察官と囚人である。あの人たちは囚人でもなければ警察官でもないはずだ。とすれば軍人というのに最も近いのではないか。仕事のみに全生活を捧げる一種の軍人である。軍人が市民と鬪つた

ら、軍人が勝つことは明かだが、そんな競争はアンフェアであり、アンフェアな競争の結果としての勝敗もアンフェアだと思うがどうか」と。

様子で私どもの訪台を心からよろこんでくれた。

付記 阿部先生はプーナ大学で博士号を授与されている。

われさきにと妻子の待つてゐるわが家にいそ

ぐバイクの行列を見てしみじみと考えさせられると、三日間の宿泊ホテル「国王大飯店」

に着いた。名前がえらそうなのは逆にまことにこじんまりしたホテルで、日本人に親しまれているというだけあって、宿泊客の多くは日本人だつた。

八時に葉 阿月先生が来訪されて講演会の打ち合わせをおこなう。

葉先生は、中村元先生に師事し、東京大学で学位をとられた関係上、また「私がブーナ大学で学ぶことができたのは阿部博士のおかげです」といわれるよう、インドのブーナ大学でも阿部先生から受けた恩義に深く感謝している

清水岩寺拝登

箱根湯本温泉に「箱根觀音」がある。これは通称号で「福寿院」というのが正式の寺号である。この寺は今から十六年前、八十歳の老僧島倉禪龍師が建立した寺である。その頃私は鶴見の本山で出版部長だったので、島倉老僧の大誓願にもよおされた逞しい実踐力と心意気を、本山機関誌『跳龍』を通して広く全国に紹介しようと思つて福寿院に拝登した。すると台湾の尼僧さん二人が見えていた。

島倉師の大学時代からの親友が台湾で長く教鞭をとつていた。そのご縁があつて島倉師は何

度も台湾に出かけ、知己が非常に多い。島倉師

は、

「私には、弟子がない。それにこのとおりの齢だから誰か弟子を世話してくれ」と頼んだ。すると、

「男僧はいないが尼僧ならいるだろう」

とのことで尼僧団に選考推薦を依頼してくれた。そして、「一人はだめだけど二人なら」ということで、禪暉・禪銘の二人が選ばれた。この二人はれつきとした寺の住職で、台湾で目覚ましい活躍をしているのだが、観光ビザで時折手伝いにやつてくるのであって、日本の僧籍も持つていて。そこで姉妹寺院としていつそう交流を深めようではないかということになり、二人の台湾の住職寺院と福寿院は姉妹寺院の縁を結んだのである。

その一人禪暉さんは数年前他界し、禪銘さんは台湾中部、彰化県社頭郷清水村の清水岩寺の

住職として活躍している。

さてこの島倉老僧、新寺建立について、やはり新寺を建立した善光寺方丈の指導によりめでたく大願を成就することができたことをよろこび、今後も是非とも面倒を見ていただきたいということで善光寺の末寺となつたのだが、跡を繼ぐ弟子に恵まれず、もはや百歳に間近い年齢となつたので、後事の一切を善光寺方丈に托し、台湾の姉妹寺院を是非訪ねてほしいと要請した。また、禪銘さんのほうからも是非来てほしいとの声もあつたので今回拝登することになつた次第である。

クルマで三時間はかかるということなので、少しでもラッシュをはずし、早く行つて早く帰ろうと、六時半に出発する。高雄まで通ずる高速道路に入るのだが、日本での料金所はここでは「收費站」という。名前が変るのと同じように変つているのは料金を徴収するのがうら若い

女性であること。彼女らは大きなマスクをして手袋をはめている。お金を取扱うのに手袋は不便であろうと思つたが、それにはわけがあるのだという。素手だと運転手に手をにぎられるそうな。してみると、大きなマスクにも排気ガスの吸引を防ぐほかに目的があるんじやなかろうか。

私の郷里では農家の女性が田んぼで農作業をする時、日よけ、虫よけのため、眼だけ出して顔全体を掩い隠している。これを「はんこたんな」というのだが、昔、好色の殿様がかわいい娘の児に手をつけたので、その魔手からのがれるために考案されたのが「はんこたんな」だといふ伝説があるが、收费站の娘さんたちの大きなマスクも美貌を隠す「はんこたんな」なのかも知れない。

高速道路は日本のそれに比して少しも遜色ない。サービス・エリア（休息站）なども広々と

して感じがいい。彰化まで快適に飛ばして、このインターを降りて彰化の街はずれにさしかかった時、全く予想もしなかつた思いがけない事故に見舞われた。石が飛んで来たのであろう、フロントガラスに直径四センチほどの穴があり、一瞬にしてガラスは細々になつてしまつた。むかし香嚴和尚は小石が竹に当つてカチツと音を立てたのを聞いて大悟し、「一擊所知を忘はず、更に自ら修治せず……」と言つたが、この場合は一撃に処置を講じ、至急修理に要するわけで、バイク並みに風をもろに受けながら進むと「汽車玻璃」（汽車は自動車、玻璃はガラス）の看板を出している町工場を見つけて修理をしたんだ。こうした事故は日本では殆んど耳にしないが、阿部師の話によるとインドではよくあることだという。この国でもそらしく、実際に手際よく事が運んで三十分ぐらいで修理は済んだ。



さて、工場に頭を突込んでいるわれらが愛車のリア・ウインドウを見ると、「南無阿弥陀仏」と書かれた紙が貼つてあつた。「ああ、有難い、阿弥陀さまのおかげで助かつたんだ。それにしてもフロントガラスにも貼つておけば事故がかつたかも知れないのに」などと勝手なことを言つて南無阿弥陀仏のステッカーのもとで写真を撮つたりした。

このアクシデントでかれこれ一時間近くを空費して十時二十分清水岩寺に着いたのだが、その熱烈歓迎に接したとき、この事故は、せっかく昼食を準備しているのだから、あまり早く到着してもらつては困る禪銘さんの願いが通じたのかも知れないとは阿部先生の言。まさにそのようと思わせられる歓迎ぶりで、訪問する際は、いかに交通事情とはいえこちらの都合だけではなく、相手の立場をよく考え、指定された時刻に到達するようになくてはと反省させられ

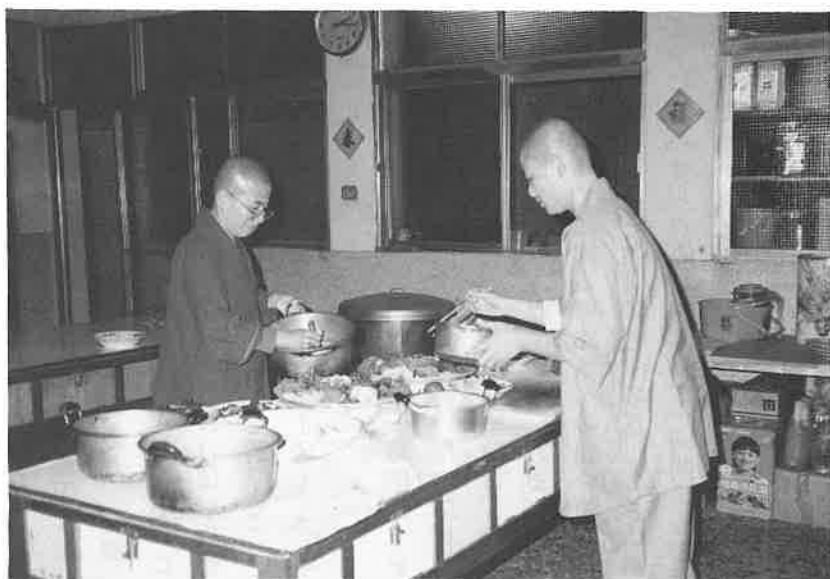
た。

「うれしくて十日前から準備してました」と
禪銘さんはいう。私とは十年ぶりの再会である。
だから歓迎の横断幕には私の住職名が「宝泉寺」
となっていた。

早速法服に着換え、日台僧侶合同で彼我の物
故者追悼法要を厳修した。禪銘さんの数名の弟
子及び信徒二十数名が参列した。

法要終つて島倉「方丈さん」のために造られ
た純日本風の建物の一室に案内され、ここで少
憩ののち境内を案内してもらい、一同昼食会場
に移つた。

黒田理事長が司会の労をとつてくれ、私が四
人を代表して訪問の挨拶を述べたのに対し、信
徒を代表して、賴樹旺氏（元国會議員で五千人
の従業員を擁する会社社長）と禪銘さんが共々
に歓迎の言葉を述べ、手造りの精進料理で接待
してくれた。美味しい料理で楽しい語り合いの



一行のために忙しく精進料理を作る尼僧さん（清水岩寺）

ひと時を共にし、一時三十分、名残りは尽きねどお別れすることとなつた。

せつかくここまで来たのだからとて、三十キロ離れた処にある名所日月譚を観光することにした。

日月譚は、台湾切つての景勝の地として国内外から多くの観光客を集めている天然湖で、海拔七五〇メートルのところにある。周囲三〇キロ、水深三〇メートル、入り組んだ細長い南西側を月、平面的な東側を日にたとえたのがその名の由来だという。

この湖の魅力は、時刻や場所、天候の加減によつてその姿と色を変えるところにあるといわれる。まことにすばらしい景觀であつて、駒沢氏の美しい写真によつて想像していただきたい。

ここには孔子、関羽、岳飛とその弟子たちを祀つてゐる「文武廟」がある。実に豪壮な建物だが、入口ではそれとは対称的に多少ユーモラ

スな二頭の赤獅子が私たちを出迎えてくれる。高さ八メートルというこの彫刻は台湾一の大きさだという。九頭の龍の彫刻もまた一見に価するものである。

また日月譚にはかの有名な玄奘三蔵法師の靈骨を祀つてゐる「玄奘寺」がある。玄奘三蔵の靈骨はもともと南京の天禧寺に祀られていたが、戦時中、埼玉県の慈恩寺に移され、今から四十一年前中国に返還されたものである。これまた素晴らしい寺である。本堂の中央にある寝釈迦、金色の涅槃像はタイ風である。玄奘堂には玄奘三蔵法師の等身大のお像がある。『般若心経』を讀んでいると、日本語のじょうずな老尼があらわれ、私たちを鄭重に出迎え、懇切丁寧に堂内を案内説明してくれた。

こうして思わず時間を要した観光参拝となり、途中ドライブインで夕食をとり、ホテルに帰り着いたのは九時過ぎだった。

台湾大学で講演

訪台第三日目、葉先生のはからいで十時から十二時まで講演会が準備され、九時に迎えの車が来るという。

私たちは耳目をたのしませていればいいのだが写真家の駒澤氏にはそういうわけにはいかぬ。絵になる写真を撮らなくてはならないし、

撮影にはいろんな制約があるので、撮れそうな時機を逸してはならない。そこで朝食前に龍山寺に行つてみようということになり、六時四十分に出発した。

龍山寺に着いたのはちょうど七時だった。この寺は東京でいえば浅草の觀音さまのような觀音信仰の寺だが、浅草の觀音さまと違うところは、大勢の信者が略法衣を身につけ、鐘に合わせて「カンジンボーサー」「カンジンボーサー」と唱えながら巡堂していた。その数百数十名、

まことに壯觀なもので、日本ではお授戒の際の巡堂でしかこういう光景を目にする事はできない。「カンジンボーサー」そう聞こえるが、これは「觀世音菩薩」と唱えているのであろう。やがて巡堂も終り、本尊さまに向つて朝のおつとめがおこなわれ、それが済んで解散となつたが、駒澤氏のおかげですばらしい光景を目にすることができた有難かつた。

ホテルに帰つて朝食を探り、迎えの車に分乗して国立台灣大学に向かう。ここは旧台北帝国大学で、現在は六学部、学生数二四、〇〇〇人という。

葉 阿月先生の室に入り、哲学系教授張先生、郭先生はじめ、大学O.Bの方々數名を紹介される。講演会会場は哲学系館の会議室で、会場には中高年から学生にいたるまでの多彩な顔ぶれで約七十名ほど集まつていた。

葉先生、郭先生の挨拶について、阿部先生が

「原始佛教」について研究の一端を披瀝し、次に私が「道元禪師の教え——『修証義』公布百周年に当り——」（文末の講演内容を参照）について述べ、最後に黒田理事長が善光寺海外留学僧派遺育英会について述べ、質疑応答に移り、終つて黒田理事長より葉 阿月先生に対し善光寺海外留学僧派遺育英会顧問の辞令が手交された。ここにはじめて、これまで未開の地であった台湾に善光寺海外留学僧派遺育英会の足がかりができたのである。

郭先生は閉会の挨拶で、「本日の催しはまことに意義深いものであつた。釈尊の生誕・成道・入涅槃の時、大地が震動したといわれるが、さきほどの地震（注・私の講演中）はまさに奇瑞であつて、今後日台仏教交流に新しい途が開けるであろう」と述べ、最後に黒板に、

沢流千億人（流れを汲む千億人）
杓底一残水（杓底の一残水）



台湾大学で海外留学僧派遺育英会の説明をする黒田方丈

と大書し、「皆さん、この素晴らしい道元禅師の言葉をおみやげとしてお持ち帰りください」と結ばれた。

ご承知の方もあろうが、半杓橋を渡つて永平寺の境内に入ろうとするところに右のように記された石門がある。これは道元禅師が水を使われる時、必要最少限の水を器にとり、柄杓の底に残った水をもとの谷川に戻されるのであった。ある時侍者がそのわけをたずねると、「児孫に使つていただくため」と答へられたというが、この道元禅師の残された仏法の水が七百五十年を経ていまなお数限りない人びとの心の渴きをいやしているのである。

郭先生は先年永平寺に参拝して、この言葉に深い感銘を受けたというのであつた。

閉会してのち、私たちの周囲に若い人が数人集まり、いろいろ話をかけてきた。中に日本の青年が韓国の尼僧さんを紹介してくれたが、そ

の尼僧さんは黒田理事長の前でフロアに頭をつけ三拝し、東京大学に留学したいのによろしくとのことだった。

ようやく会場を出ることができ、葉先生のセットしてくれたレストランに向かい、昼食をいただく。張・郭両先生、ヨガ会の白林理事長、二人の研究生等が歓談を共にしてくれた。

二時大学に戻り、大鳥富太郎文庫の存否を確かめたところ、確かに存在する旨の答えがあった。目録を見せてもらつたが八〇〇冊に及んでいた。ここに大鳥文庫というのは、昭和五年、大鳥富太郎男爵がその蔵書で「キリストン関係」と「日欧交通史」の世界的珍本を一誠堂書店に売り込もうとしたところ、二万円という当時としては破格の値段で書店が受け取らなかつたため知人の紹介を得て新設間もない台北帝国大学に売り込み、大学図書館に納めたというもので、今日では数億円の価値のあるものだという。

なお、大鳥富太郎氏の実父は江戸幕府の幕臣、
陸軍奉行大鳥圭介氏（後、華族学校長・清国・

朝鮮特命全権公使）で、元慶應大学医学部教授
大鳥蘭三郎氏は孫にあたり、この人の知人が黒
田理事長に存否の確認を頼んだもの。

二時四十分、文学院院長（文学部長）黃啓方
教授に会い、三時には校長（総長）孫震先生に
会つた。

孫校長は、歓迎の言葉を述べ、「午前中は授業
があつて残念ながら講演を聞くことができなか
つた」といわれ、ついで「本学で学位をとつた
人は一、三〇〇人もいるが葉先生は東京大学で
学位をとられ、インドにも留学した稀に見る博
識真摯な先生である。葉先生を通して本学との
交流を深めていただければ幸いである」と、たい
へん好意的な言葉を述べられたので、今後の配
慮をお願いして退出した。

以上で訪台の目的は首尾よく達成したのでホ
ツとしてホテルに戻つたが、最大のみどころ故
宮博物院に足を向けるひまもない実にあわただ
しい旅だつた。

最終日第四日目は帰国するだけの日程で九時
にホテルを出た。空港に着いたが定刻間近かに
なつても乗る飛行機が到着していない。結局一
時間遅れて飛び立つことになつた。

今回の旅がはじめから交通遅延に見舞われた
のはどうも不思議なめぐり合わせだつたが、私
たちの行動はその遅延を取り戻して充分だつた
のでたのしい旅だつた

また、帰国して間もなく正月を迎えたので、
お会いした方々から年賀状をいただき、友好深
厚の思いを新たにした。

むすび